【236】

氏　名（本籍）	森（もり）　優子（ゆうこ）（福岡県）
学位の種類	博　士（デザイン学）
学位記番号	博　甲　第　3496　号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	**日本語の表記符号に関する研究** －表記符号原則の提案に向けて－

主　査	筑波大学教授	博士（デザイン学）	西　川　　潔
副　査	筑波大学教授		穂　積　穀　重
副　査	筑波大学助教授	博士（芸術学）	中　村　伸　夫
副　査	武庫川女子大学教授		佐　竹　秀　雄

論文の内容の要旨

本論文は第1部「表記符号の歴史的変遷」，第2部「表記符号の現状調査」，第3部「表記符号原則の提案」からなり，それぞれ第1章～第3章，第4章～第5章，第6章～第7章から構成されている。

第1部は，表記符号の歴史的変遷についての調査と考察である。表記符号の江戸時代から現代までの様態についてまとめ，その使用と解釈の変遷について考察している。

章ごとの概要は以下の通りである。第1章は，江戸時代から明治時代にみる表記符号意識化の流れを概観し，句読法に関して記述のある資料を中心に，その理論と意識を抽出し，実態を把握している。江戸時代の資料では，主として読み手にとって漢籍を理解するために必要な，訓点の一部としての句読法にあり，明治時代に移ると，西欧の活版印刷術の移入に伴って，多くの試行錯誤が見られ，正しく文意を伝達するための句読法の重要性が認識される点を指摘している。第2章では，表記符号を意識した明治時代の作家の作品にみる事例について調査している。表記符号を意識していた明治20年代の小説家たちの作品を中心に考察し，当時，表記符号を明確な意図をもって文章に取り入れていた小説家である二葉亭四迷，山田美妙，尾崎紅葉らの作品を中心に，彼らの表記符号使用の意識とその事例を検証した。それらには個性的で多様な表記符号の使用があり，その試行錯誤の様態が明らかになった。また各小説家の表記符号に対する理解と用い方は，個人のなかでも時間的に変化していたことが確認された。さらに，わが国の印刷揺籃期における小説の組版は，荒削りながらダイナミックであり，デザイン的にみて刺激的で魅力的な事例が多くあったことを確認している。第3章では明治時代から現在に至る表記符号の用法と名称の変遷を整理した。調査した範囲において表記符号に共通した名称は確立していなかったことや，文部省の基準提示によって表記符号が急速に一般化したこと，また戦後，記号の種類が多くなったこと等を明らかにした。

第2部では，第3部で行う表記符号原則提案のために，表記符号の現行基準の把握，一般の人々の意識，印刷物における現状の把握をおこなった。第4章では，句読点以外の表記符号である括弧類の用法に関する現状を把握し，人々の意識を分析した。第5章では句読点に絞って印刷物や一般の人々の使用実態を調査し，基準と使用実態の乖離を明らかにした。

第3部では，第1部と第2部における調査をもとに，表記符号原則を作成した。第6章は表記符号原則提案のために，現在の表記符号を整理し，使用法等を分析し，表記符号を「基本用法」と「拡張用法」に分けて一覧表とした。「基本用法」は10種の符号からなり，一般的な文章を書くために必要な最小限の符号セットであり，「拡張用法」も12種の符号からなり，特殊な専門分野や表現性の強い文章を書く際に追加して使用する符号のセットとした。

第7章は，結論にあたる。日常の文章や論文のような正確さを旨とする文章の場合，基本的に一つの符号に一つの意味を持たせることを原則とし，使い方を限定することで，符号に文字と同等かそれ以上の意味を付与し，コミュニケーションを円滑にすることがねらいである。選んだ表記符号は10種類である。

審査の結果の要旨

本研究を通して得られた成果とその意義をまとめると次のようになる。まず表記符号をめぐる問題の所在を明らかにしたこと。次に表記符号の過去から現在までの，考え方と実際の印刷物の事例を分析することで，歴史的様態を把握したこと。また現在の表記符号の用法における実態と問題点を明らかにしたこと。さらにアンケートによる表記符号の現状の調査によって，人々がもつ意識の実態を明らかにしたこと。最後に歴史的背景と現状調査に基づいて，表記符号原則の提案を行ったことである。

これまで当該分野の研究は主として国語学や言語学の領域か，編集の立場から行われてきた。デザインという統合した視点から，しかも符号を整理し，単一の意味を持たせ，より合理的な言語表記を目指したものを評者はこれまで見ていない。第2部の表記符号の現状調査など，個々の研究においては未だ不十分な点が指摘でき，最終提案の妥当性も今後の推移を見つめる必要がある。しかし，明治以降の流れを把握し，多様な既成の符号を整理し，定期刊行物の句読点について実態把握をし，またアンケート調査によって書き手の意識の把握に努めるなど，多面的に表記符号について調査した点は視覚伝達デザイン分野の研究として価値のあるものと思われる。また自らの論文を，絞り込んだ10種の符号で表記し，破綻の無いことを証明するなど，曖昧さの少ない日本語の表記の実現に，大いに貢献しうるものと評価できる。

よって，著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。